
艦魂年代史外伝 連合艦隊最後の希望 十勇士出撃

黒鉄大和

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

艦魂年代史外伝 連合艦隊最後の希望 十勇士出撃

【Nコード】

N1979D

【作者名】

黒鉄大和

【あらすじ】

桜の花びら舞う1945年春、東京は焦土と化し、沖縄では日米陸軍の壮絶な地上戦が繰り広げられている頃、日本海軍最後の艦隊第二艦隊に出撃命令が下った。その命令に誰もが愕然とした。それは、水上部隊による特攻作戦であった。第二艦隊の10隻の艦艇に宿る十人の艦魂の少女達は愕然とした状況の中でも覚悟を決め、沖縄へ行く事を決意する。そして、日本を守る為、約四〇〇〇人の将兵と十人の艦魂 十勇士が最後の戦いに挑む。

第一章 十勇士（前書き）

艦魂年代史外伝シリーズ第十六弾は十勇士の物語です。

特攻作戦という悲しき戦いに出撃した十人の少女達の勇姿を描きました。

本編『恋する乙女は大艦巨砲主義』最後の戦いである坊の岬沖海戦を大和、翔輝以外の九人の艦魂からの視点で描いた今作品は外伝シリーズの集大成（本人評価）で、今までの短編に比べて三倍近い量の持つ外伝シリーズの最高傑作（本人評価）ですが、あまりの多さなので『長い』という指摘を受けたので、急遽分けました。そんな僕の渾身の作品、どうかご覧ください。

第一章 十勇士

一九四五年四月五日、連合艦隊参謀長草鹿龍之介少将が日本海軍最後の艦隊 第二艦隊旗艦・戦艦「大和」に来艦した。

彼の口から放たれた命令は、戦艦「大和」以下第二艦隊十隻の戦闘艦による沖縄海域の敵艦隊に対する水上特別攻撃であった。

第二艦隊司令長官伊藤整一中将はこの命令を一度は拒否するが、「一億総特攻の先駆けになってほしい」という言葉に、首を縦に振った。

こうして、第二艦隊は旗艦・戦艦「大和」以下軽巡洋艦「矢矧」を旗艦とした第二水雷戦隊 駆逐艦「磯風」「浜風」「雪風」「朝霜」「初霜」「霞」「冬月」「涼月」の計十隻を率いて水上特別攻撃隊として沖縄海域に出撃する事になった。

特攻

それは生きて帰って来る事を前提としない死地への旅立ち。

日本海軍の象徴である戦艦「大和」以下の日本海軍最後の艦隊は最後の出撃に向けて最後の調整を始めた。

第二艦隊は「大和」以外は皆第二水雷戦隊という部隊に属する。

水上雷撃戦部隊として世界最強の破壊力を誇っていた日本海軍水雷戦隊の中でも練度・攻撃力共に最強と謳われた名実共に世界最強の水雷戦隊。それが第二水雷戦隊である。

日本海軍自慢の酸素魚雷を余す事なく使用し、ソロモン海の激戦では多くの米艦艇を沈めた第二水雷戦隊は、まさに日本海軍の精鋭部隊であった。

しかし、長きに渡る戦争で第二水雷戦隊は次々に所属駆逐艦を失い、かつて最新・最強の駆逐艦が配備され、世界中の海軍を震え上がらせた大に水雷戦隊も、今では古参・新米入り混じりの集成部隊と成り果てていた。

そんな現第二水雷戦隊旗艦を務めるのは阿賀野型軽巡洋艦三番艦・軽巡洋艦「矢矧」である。

戦中生まれの「矢矧」は水雷戦隊に特化した新鋭艦であり、その性能は第二水雷戦隊には申し分なかった。

そんな旗艦「矢矧」の配下には四つの駆逐隊が存在し、計八隻の駆逐艦を従えていた。

開戦以来太平洋の海を無尽蔵に駆け回り数々の戦果を勝ち取った陽炎型で編成された第十七駆逐隊 駆逐艦「磯風」「浜風」「雪風」。

戦中生まれ、戦前生まれの新旧混成第二一駆逐隊 駆逐艦「朝霜」「初霜」「霞」。

最新鋭の秋月型及びその改良型冬月型の新鋭駆逐艦で編成された第四一駆逐隊 駆逐艦「冬月」「涼月」。

それら九隻の艦艇で編成されたのが第二水雷戦隊。

その任務は、水上特別攻撃隊として作戦の要である戦艦「大和」を無事に沖縄まで守り切る事。

そんな第二水雷戦隊の艦魂達は皆、旗艦・戦艦「大和」に集結していた。

日本海軍の象徴である戦艦「大和」の第三会議室。常日頃あまり使用される事のないこの部屋は三年以上続く太平洋戦争の間、連合艦隊艦魂司令部の会議場として使用されていた。

そんな歴史ある部屋には、第二水雷戦隊の艦魂および連合艦隊司令部の艦魂のほとんどが揃っていた。

そんな中、下士官用の軍服を着た柔らかなポニーテールをした少女が作戦書類を眺めていた。

「矢矧。もしかしたら、これが最後の作戦になるかもしれないわね」彼女の名は第二水雷戦隊旗艦・軽巡洋艦「矢矧」の艦魂。第二艦隊の事実上副司令官である。

そんな彼女のため口を聞くのは水兵服を着た長い黒髪が美しい矢

知より年上の少女。

「そうですね。栄光の第二水雷戦隊の歴史を私達で終止符を打ってしまうのは忍びないですが、仕方ありません」

上官であるはずの矢矧が敬語で話す彼女の名は初霜。第二水雷戦隊隷下第二一駆逐隊所属の初春型駆逐艦四番艦・駆逐艦『初霜』の艦魂にして、第二艦隊最古参の艦魂である。

まだ指揮官として未熟な矢矧の頼れる腹心である。

「昔は、第二水雷戦隊と言ったら私達駆逐艦の誰もが憧れる最高の部隊だったのよね」

初霜は懐かしそうに虚空を見詰める。

「そうですね。私も昔は憧れました」

矢矧の横で話を聞いていた短めな髪に対し肩まで掛かるもみあげが特徴の意志の強そうな瞳をした少女 朝潮型駆逐艦九番艦・駆逐艦『霞』の艦魂がうなずいた。

「第二水雷戦隊に配属される事は最高の勲章のようなものでした」
「そうよね。懐かしいわ」

戦前生まれの二人が平和だった昔を思い出して微笑み会うのを見て、戦中生まれの矢矧はどこか寂しそうに微笑んだ。

一方、そんな三人のすぐ横では六人の少女が今回の作戦について話し合っていた。

「今度の作戦に参加する艦艇は少なすぎるよね。かつて世界三台海軍国として英米に肩を並べていたあの頃の日本海軍の姿はどこもないわね」

セミロングの髪をした少女 陽炎型駆逐艦十二番艦・駆逐艦『磯風』の艦魂がため息した。

「まあ、仕方ないよ。まだ私達以外にも横須賀、佐世保、呉、舞鶴に三〇隻以上の駆逐艦はいるけど、肝心の重油の残量が少ないから、これが限界なのよね」

そう言ったのは磯風に似た顔をしたショートヘアをした陽炎型駆逐艦十三番艦・駆逐艦『浜風』の艦魂。

磯風と浜風はかつて真珠湾攻撃に参加した歴戦の戦士である。

「そうね。もし、捷一号作戦（レイテ沖海戦）が成功していれば、こんな事にはならなかったのにね」

二本の胸まで掛かる長めの三つ編みをした少女　夕雲型（改陽炎型）駆逐艦十四番艦・駆逐艦『朝霜』の艦魂の言葉に二人はため息する。この三人はレイテ沖海戦の際、主力部隊である栗田艦隊に属していた。

「成功しれいれば、こんな座して死ぬ仲間を生まなくてすんだのに」
「この作戦だって、もつと艦艇が増やせたのにね」

「全部栗田長官のせいです」

悲しげにため息する三人を見て苦笑いする少女がいた。

「もう、みんな終わった事をいつまでも悔やんでも前には進めないよ？　今は今できる事をがんばらなくちゃ」

そう言うのは大和の従兵を務める陽炎型駆逐艦八番艦・駆逐艦『雪風』の艦魂である。今では数少なくなった陽炎姉妹・義理の夕雲姉妹を含んだ最年長者となっている。

前向きな雪風と違い、三人はかなり消極的である。

「今できる事って、一体何さ？」

磯風が不思議そうに聞くと、雪風はあまりない姉としての尊厳をフルに使って堂々と宣言した。

「祖国を、大切な人を守る為に全力で敵に立ち向かう事よ」

「かっこいい事言った！　と満足する雪風に対し、三人はにやりと笑顔で彼女を見詰めた。

「な、何よ」

「私も義姉さんみたいに恋すれば強くなれるのかな？」

「なあっ！？」

ニヤニヤと言う朝霜の言葉に雪風は顔を真っ赤に染める。

「そ、そんなんじゃないわよッ！」

「顔を真っ赤にさせて言っても説得力ないわよ。ね・え・さ・ん」
嬉しそうに言う浜風を雪風はこれ以上ないってくらい顔が真っ赤

になる。

「『よお、俺は長谷川翔輝。俺は雪風が好きだぜ。愛してる』」

磯風は自分の十八番の声マネを披露する。見事に雪風の想い人そっくりな声だが、キヤラは完全に違う。だが、今の雪風はそれで十分だった。

「はうう・・・っ！」

想い人の声で『愛してる』なんてセリフを言われたせいで雪風はもうとろんとした最高に幸せそうな笑顔で椅子から転げ落ちると、その場でのた打ち回った。

「ね、姉さん」

浜風が慌てて止めようとしますが、雪風はもうはしゃぎまくり。

「おい雪風ッ！ テメエ何騒いでんだッ！ 静かにしてるッ！」

その怒鳴り声に雪風は慌てて椅子に座り直して姿勢を正すと、真っ青な顔で今自分に怒鳴った少女を見詰める。

髪質の硬そうな髪をポニーテールでまとめ、不機嫌そうにしている一見少年に見えなくもない彼女は残存日本戦艦最古参である戦艦『榛名』の艦魂である。気性が荒く、男勝りで乱暴な彼女だが、皆の姉貴的存在として結構ファンが多かったりする。ちなみに少女の外見とは裏腹に艦齡は今年で三十路を迎える。

「す、すみません・・・」

もう先程までのハッピー気分はどこかに吹き飛んでしまった。

「ったく、テメエって奴は」

「まあまあいいじゃない。まだ会議は始まってないのよ？」

愚痴を零す榛名にそう言ってなだめたのは長い長髪に優しげな雰囲気な放つ大人っぽい少女 元連合艦隊旗艦・戦艦『長門』の艦魂だ。少し天然ボケ＋色恋沙汰に過激に反応する彼女はみんなのお姉さんの存在で絶大な信頼を受けている。

そんな二人を見詰め小さく微笑んでいるのは戦艦『伊勢』、『日向』の艦魂。その横で天使の笑みを浮かべているのは商船改造空母『隼鷹』の艦魂。

今ではすっかり減ってしまった日本海軍艦魂司令部の要員である。一方雪風は恨めしそうな目で磯風を睨むが、磯風は目にたつぷりの涙を溜めて腹を抱えながら必死に声を抑えて笑っている。

「い、磯風・・・ッ！」

「雪風。その辺にしとけつて。それでも私達の先輩？」

そう言つて呆れる少女は榛名とは違った柔らかなポニーテールをゆらゆらと揺らしている。

「ううう、冬月まで私の事を・・・」

「また恥をかかせおつて・・・」

泣きそうな雪風を見て呆れる少女は冬月型（改秋月型）駆逐艦一番艦・駆逐艦『冬月』の艦魂。来月ようやく一歳を迎える新鋭駆逐艦の艦魂である。

冬月は情けない自分の先輩を見てため息する。

「それでも汎用駆逐艦最高峰と謳われる陽炎型駆逐艦の最年長者なの？」

「そんな事言われても、陽炎姉さんや不知火姉さんもみんな死んじやつて、成り行きで最年長者になっただけだし・・・」

陽炎型駆逐艦は全部で十九隻存在したが、今でここにいる三隻とシンガポールに配置されている九番艦『天津風』のみになった。その『天津風』もこの四日後、船団護衛中に敵機の攻撃を受けて大破自力航行で帰還しようとしたが、途中で機関が沈黙し、爆破処分された。

今ではたった四人に減ってしまった陽炎姉妹は、雪風より上が皆戦死してしまつた為に最年長者になっているが、姉としての威厳は微塵もなかった。

「私、姉失格だよな？」

「失格どころか、入試ならテストさえ受けさせてもらえないね」

冬月の追撃にもはや雪風は爆沈寸前であつた。

「こら冬月。あんまり雪風さんをいじめないでよね」

冬月を少し大人にしておとなしくさせたような少女

秋月型駆

逐艦三番艦・駆逐艦『涼月』の艦魂が冬月をしかる。

「でも姉さん、雪風の情けなさは天下一品だよ？」真顔で言う冬月。

「そ、それはそうかもいけないけど・・・」困る涼月。

「涼月！？ 助け舟になつてないよ！？」驚愕する雪風。

「まあ、姉さんは姉としては未熟だね」うなずく磯風。

「そうね」苦笑いする浜風。

「満場一致ね」諦めなさいと言いたげな目で雪風を見詰める朝霜。

雪風はぶるぶると体を震わせ、絶叫した。

「みんなひどいよおおおおおっ！」

「うるせえええええっ！」

今にも跳び蹴りを放ちそうな様名を長門が止めていると、部屋のドアが開いて二人の少年少女が現れた。

柔らかな長髪の揺らしたまだ幼さを残す士官服を着た少女と、同じく士官服を着た細メガネをした少年 第二艦隊旗艦・戦艦『大和』の艦魂と『大和』の先任航海士の長谷川翔輝航海少佐である。

矢矧以下第二水雷戦隊の所属の九人は立ち上がって敬礼する。

「第二水雷戦隊旗艦・軽巡洋艦『矢矧』艦魂以下、駆逐艦『磯風』

『浜風』『雪風』『朝霜』『初霜』『霞』『冬月』『涼月』の艦魂、

戦艦『大和』と共に出撃します」

矢矧の言葉に大和はうなずき、九人は座り、大和も席に着く。その横に翔輝も座る。

大和は一度目をつむって深呼吸し、目を開く。

「今作戦は沖縄へ出撃です。かなり危険な任務ですが、諸君らの奮闘を期待します。出撃は明日一六〇〇です」

大和の説明に矢矧達はうなずき、じつと大和を見詰めた。

自分達が命を懸けて守るべき司令官は、まだまだ幼く、見た目は十四、五歳くらいにしか見えない。艦齡もまだ三歳ぐらい。まだまだ子供だ。

矢矧や雪風達との差もそれほどない。

艦隊最古参の初霜は苦しげに唇を噛んだ。

「・・・こんな子供を、死の戦場に連れて行かなきゃいけないの？」
小さくつぶやいたその言葉が聞こえた者は誰もいないが、初霜はギョツとズボンを握り締めた。

会議が始まるとすぐに元連合艦隊旗艦である長門が挙手した。
「今度の作戦はあまりにも無謀よ！ 生きて帰れる保障はないわ！
なのに、どうしてそれに『大和』が行かなくちゃいけないの！？
行くなら私が行くわ！」

長門は先程までの温和な表情を消し、悲痛にゆがんだ声で叫んだ。
連合艦隊旗艦経験が最も長い彼女は日本海軍最後の作戦に対する責任を感じると同時に大和達を死地へ向けるのが純粹に嫌だった。

「いや、ここは最年長者の俺が行くッ！」
現連合艦隊最古参の榛名も叫んだ。

仲間想いの彼女にとつて、後輩でありこの戦争で付き合いの長い妹のような存在である大和を死地に行かせる事など、絶対に納得できなかった。

死地へ行くなら、最年長者である自分が行き、日本海軍の有終の美を飾るという姉譲りの使命感が彼女を突き動かしていた。

大和という若すぎる命を守ろうと長門と榛名が叫ぶが、大和は首を振る。

「私が行きます」

「ダメよッ！ 危険すぎるわ！」

「危険は百も承知です。でも、この連合艦隊最後の作戦に、連合艦隊の象徴である私が行かずしてどうします？ 瑞鶴は日本機動部隊の有終の美を飾りました。なら、私は日本連合艦隊の有終の美を飾ります」

大和の決意は揺るがなかった。いくら幼いとはいえ、彼女だって戦艦の艦魂。日本海軍の象徴であり世界最大最強としての誇りがある。例え世間知らずとか、無知だと言われても、自分が成すべき責務を果たす。それが大和という軍人である。

大和の今まで見た事のないほど真剣な瞳に、必死に説得しようと

声を荒げていた長門と榛名も沈黙した。そんな彼女達を見詰め、大和は優しい笑みをする。

「大丈夫です。私は見事に任務を完遂させて戻って来ますから。私にはこんなの多くの頼もしい仲間がいます。それに」

大和は横に座っている翔輝を見詰める。それに気づいた翔輝も大和を見詰め返した。

「私には、少佐もいます。だから、大丈夫です」

「僕なんか頼りないと思うけど」

「そんな事ありません。私にとって、一番頼りになる方は少佐です」
見詰め合う二人に、もはや何も言う言葉はなかった。

沈黙する長門と榛名。見詰め合う大和と翔輝を見て、雪風は小さくため息した。

確かに自分は彼女の従兵として今まで接して来た。だが、考えてみれば自分より一歳ほど年下である。それに何より、大切な存在である彼女を死地へ行かせるなど、本当は断固反対である。そんな事をするくらいなら、持ち前の幸運力を発揮して単艦で敵地に突っ込むという想いもある。

この会議上で雪風は大和を説得しようと考えた。艦魂の思いなど関係なく軍隊は動くので所詮は意味ない事だが、そんな事今の彼女には考えられなかった。

長門や榛名に便乗して攻めようとしたが できなかった。

大和は本気であった。

本気でこの作戦に全力を注ぐ決意の炎が、彼女の瞳に灯っていたから。

雪風は、何も言えなかった。

自分の大切な人は、戦う決心を固めたのだ。

もう、何も言う言葉はなかった。

自分にできる事は、そんな彼女を守りきる事だけだ。

彼女に死んでほしくない。だが、それと同じくらい、彼女の決意を壊したくない。そんな想いの狭間に雪風は苦しんだ。

一人苦しげに唇を噛む雪風の肩が、そつと叩かれた。振り向くと、そこには真剣な瞳を向ける冬月がいた。まだ会って一年も経っていないが、彼女は自分を支えてくれた親友のような存在だ。

そんな冬月は自分を真剣な瞳で見詰めると、そつと力なく首を振った。

もう、何も言うな

そんな彼女の想いが手を伝わって雪風の心に届いた。

雪風は涙を流すが、やがて小さくうなずいた。

彼女の中で、新たな決意が生まれた。

彼女を、必ず守り切る

涙を流しながら強い決意をする雪風を見て、冬月は小さく微笑んだ。

雪風は自分より年上だが、どこか妹のような危なっかしげな所がある。

自分にできるのは、そんな彼女の支えとなり、彼女を正しい方向に導く事だけ。

艦魂である自分達に自由はない。

あるのは束縛された環境と状況、そして時間だけ。

自由がなく、何もできない中でも、何かできる事があるなら、それに全力を注ぎたい。

それが冬月の決意だ。

今の自分にできる事は、無事に『大和』を守り切る事だけ。

日本駆逐艦としての誇りと、『冬月』という少女としての誇りを抱き、冬月は決意の目で自らが守る指揮官を見詰めた。

矢矧は目をつむりながら小さくうなずいた。

自分達の指揮官は本気だ。

本気で祖国を守りたい。そんな想いがひしひしと伝わってくる。

司令官が行くと言うなら、自分達はそれを手助けし、彼女の願いを叶えるまで。それが自分達の責務である。

矢矧は自分の配下にいる八人の艦魂を見詰める。誰もが矢矧を見詰め、決意に満ちた瞳で自分を見詰めている。

皆、心は同じであった。

改めて、九人の艦魂は己の命を託す司令官を見詰める。

まだまだ子供な、幼い顔の少女の瞳には、決意の炎が宿っている。それだけで、矢矧達は十分だった。

そんな決意に燃える大和の横で話を聞いていた翔輝は、ふと小さな笑みを浮かべて皆を見た。

「連合艦隊最後の作戦だ。ここはかつこよく決めないとね。で、僕から意見なんだけど、今作戦に参加する艦魂は十勇士と呼ぼうよ」
翔輝の画期的な意見に大和が賛同する。

「それはいいですね。では、十勇士の方々。共に敵を討ちに行きましよう！」

『了解ッ！』

第二水雷戦隊の艦魂は見事な後世に残るような見事な敬礼で大和の言葉に答えた。

十勇士

なんともすばらしく、なんとも儂き勇士なのだろう。

だが、一度開いた花が散るまでその命を輝かせるように、十勇士もまた、己が花を最高の形で終わらせようとしていた。

決意をした十人の艦魂を見詰め、長門は小さく笑みを浮かべた。

「なら、写真を撮りましょう。あなた達十人を写した、十勇士の勇姿をね」

長門の妙案に大和はうなずいてカメラを発現。九人の艦魂を率いて撮影位置に付く。

「何してるんですか？ 少佐も一緒ですよ！」

そう言っ少し離れたいた所にいた翔輝の手を大和ぐいぐいと引っ張る。

「ぼ、僕も？ い、いいよ。それにこれは十勇士なのであって」

「いいんですよ！ 少佐は私達と共に戦う同志なんですから！ み

なさんもいいですよね？」

大和の質問に全員がうなづく。彼だって、共に戦場に向かう同志なのだ。仲間はずれにする理由などない。特に雪風は嬉しそうに微笑む。

大和や矢矧達に負けたのか、翔輝は諦めたように大和に手を引かれて撮影位置に付く。端に写ろうと隅に行く翔輝を大和が怒って「少佐はこつちです」と言って引つ張り戻した。そこは中央だった。「ちよつと待つて！ いくら何でもここはまずいつて」

慌てる翔輝に大和は天使の笑みでその身に抱き付く。

「いいんですよ！ ほら、長門さん早く撮ってください！」

「しょうがないわねえ。いくわよ」

長門が撮影モードに入ると翔輝も諦めて中央に立った。

矢矧達はそんな自分達の司令官と少年の淡い恋物語を見て微笑ましげに微笑んだ。

大和は翔輝に抱き付いて嬉しそうに笑みを浮かべる。そんな彼女を見てうらやましそうに見詰める雪風。すると、

「ほら、こんな所にいないで、姉さんもッ！」

「え？ ちよつと ッ！」

後ろにいた磯風に無理やり押され、雪風は大和とは反対側の翔輝の横に出してしまった。

慌てる雪風を翔輝が不思議そうに見詰めると、雪風は顔を真っ赤にしながらすつと彼に抱き付いた。

これが最後になるかもしれない。

そんな想いが頭をよぎったが、雪風はそれを否定した。

必ず生きて帰ってくる。

そう考え直し、雪風はギュッと強く翔輝に抱き付く。

大和が突然行動を起こした雪風に何か言おうとした刹那、長門はシャッターを押した。

結局、翔輝を中心に艦魂達が写り、大和と雪風が翔輝に抱き付くという形になった。

耳まで顔を真っ赤にさせている雪風の肩を磯風が「姉さんって本当に初々しいねえ」と嬉しそうに言って叩くと、雪風は怒鳴りたい衝動と翔輝に抱き付けた喜びがぶつかり、結局何も言えなかった。

雪風の勇気に拍手喝采する磯風、浜風、朝霜、冬月、涼月。そんな五人を見て矢矧、初霜、霞は微笑んでいた。

焼き増しされた写真は十人の艦魂、そして翔輝に渡された。

会議は終わり、連合艦隊司令部要員は部屋に残った。たぶん、あの翔輝という少年と最後の別れをするのだろう。

十勇士という新たな名をもらった矢矧達は部屋を出ると、それぞれ自艦に戻った。

第一章 十勇士（後書き）

短編で掲載したのに『長い』という指摘を受けたので、慌てて長編化しました。

五つに分けられて読みやすくなったので、どうか最後まで読んでください。

第二章 出撃前夜祭

その夜、『大和』の会議室では宴会が開かれ、十勇士他多くの艦魂が禁酒を破って大盤振る舞いで飲みまくっていた。

矢矧、初霜、霞は三人で円陣を組んで飲む中、雪風は大和達の輪の中に入っていて、そんな彼女に従うように磯風、浜風、朝霜、冬月、涼月の五人も少し離れた所に円陣を組んでいた。

なぜかいつの間にか王様ゲームを始めた大和達を見詰め、涼月は不思議そうに首を傾げた。

「駆逐艦の艦魂なのに、雪風さんは何であんなに士官と仲がいいのかな？」

「雪風は大和司令の従兵だからね。その関係なんじゃないの？」

「もう。何であなたはそう雪風さんに失礼な態度をするの？」

もはや怒る気力もないといった感じの涼月に対し、冬月は酒をグイッとあおる。

「何でって言われてもね。そういう関係なんだもの」

まったく悪びれた様子のない冬月に涼月はため息する。

「・・・はあ、私は情けない」

「まあ、いいじゃない。姉さんだって気にしてないんだし」

磯風は笑いながら言うが、涼月は首を横に振る。

「そうはいきません。階級を守る事は絶対です」

聖物の涼月は先輩である磯風の言葉を否定する。そんな涼月の肩をそつと叩く浜風。

「もう、最後の最後まで眉間にシワを寄せるものじゃないわよ」

「浜風さんまで、もっと階級を気にしてください」

「そんな聖物の右翼主義の艦魂は金剛さんを筆頭にもうほとんど戦死しちゃってるからね。残ってるのは私達のようなあまりガミガミ言わない左翼主義ばかりよ」

多くの駆逐艦を失いながらも敗戦間近となったこの戦争は犠牲に

対し誕生が少なく、古参の駆逐艦艦魂は特にソロモン海の激戦以降激減し、新米の駆逐艦艦魂を指導する古参がいなくなりあまり軍規に敵しくない左翼派が増大し、古参の右翼派が激減するという、戦前ではありえない状況に陥っている日本艦魂社会。

「あの『鬼の金剛』さんが生きていたら左翼派は皆殺しにされてるかもね」

朝霜の言葉に皆うなずく。

鬼の金剛とは金剛型戦艦一番艦・戦艦『金剛』の艦魂である。

去年の暮れに戦死したが、今でも日本海軍最古参の艦魂であると同時に軍規にすさまじく敵しく、鉄拳制裁・暴力指導を行う右翼派筆頭の艦魂であり、日本海軍艦魂社会の恐怖の象徴でもあった。

そんな彼女も、今では海の底である。

そんな変わってきた艦魂社会に、新入りながら右翼派に属する涼月は頭を抱える。

「日本海軍は徹底した規律と美化を基調としているのに・・・」

「諦めなつて。十勇士も姉さん以外はみんな左翼派だよ？」

もう今にも泣きそうな少し生まれる時代を間違えた涼月を一瞥し、冬月は親友である雪風を見詰める。と、

「ゆ、雪風ッ！」

「は、はいっ！」

なぜか翔輝が顔を真っ赤にして雪風の前に立ち、雪風も顔を真っ赤に染めている。そして・・・

「ぼ、僕はお前の事が好きだッ！ ずっとずっと好きだったッ！

これかもずっと一緒にいてくれッ！ お前を、愛してるッ！」

突然の告白に冬月達の会話も止まった。

「はうわああああ・・・っ！」

大量の鼻血を出し、雪風は目をぐるぐると回しながら幸せそうな笑みを浮かべて気絶した。

「ね、姉さんッ！」

「ちよつとッ！ 誰かティッシュ持って来てえッ！」

磯風と浜風が慌てて抱き起こすが、雪風はもうこの上なく幸せな笑顔で気絶し、鼻血を大噴出している。

そんな親友を見詰め、冬月はため息する。

「まったく、何やってるのよ」

そんなふうには雪風を急遽氷を使って冷却させていると、矢矧達が隣の腰を下ろした。

「どう？ 楽しんでる？」

矢矧の言葉に対し、磯風はため息する。

「冗談。明日特攻に行くつてのに、楽しめませんよ」

その言葉に冬月達が沈黙する。

今でも鮮明に思い出せる、昼に『大和』甲板で発表された作戦内容。

茲ニ特二、海上特攻隊ヲ編成シ、壮烈無比ノ突入作戦ヲ命ジタルハ、光輝アル帝国海軍海上部隊ノ伝統ヲ発揚スルト共ニ、其ノ栄光ヲ後世ニ伝ヘントスルニ外ナラス。皇国ノ興廢ハ正ニ此ノ一挙ニアリ。各隊ハ、特攻隊タル事ヲ胸ニ秘メ、殊死奮戦、敵艦隊ヲ随所ニ壊滅シ、以テ、皇国無窮ノ礎ヲ確立スベシ

生きて帰って来よう。

そんな儂き希望を抱いていた十勇士の心をもろくも打ち砕いたその作戦内容は、二度と帰って来る事を許さぬ 特攻作戦だった。

希望を打ち砕かれた十勇士はこうして笑顔で話をしていたが、本当に楽しそうに微笑んでいる者など一人もない。

明日死に行く者と、明日死に行く者を見送る者。

心から宴会を楽しめる者など、いる訳もない。

沈黙を続ける第二水雷戦隊。すると、「何暗い顔してるのよ」と言つて長門が現れた。

慌てて敬礼しようと立ち上がる矢矧達に「あ、そのままでもいいよ」と笑顔で言う長門。

「長門司令。大丈夫なのですか？ 先程かなりの量のお酒を飲まれていたようですが」

「大丈夫よ。騒ぎまくったら酔いなんて吹っ飛んじやったわよ」
そう言って笑う長門を一瞥し、矢矧達はぐったりと床に転がって
いる大和達を見詰めた。

「あれだけ騒げば酔いも吹き飛ばしますね」

矢矧の言葉に皆何度もうなずく。

長門は優しい笑みのまま矢矧の隣に座る。

突然隣に高級士官である長門に座られた矢矧は緊張するが、そん
な彼女に長門は優しく、

「緊張しなくていいわよ。戦艦か軽巡か駆逐艦かなんてそんな事些
細な事なんだから」

「そんな事無理ですよ」

矢矧の言葉に長門は「いいじゃない。もっと気楽にやろうよ」と
言って微笑む。そんな彼女の後ろでは涼月が「そういえば長門司令、
左翼派筆頭だったなあ・・・」とため息している。

しかし、社交的な性格な長門はすぐに第二水雷戦隊に溶け込み、
すっかり意気投合していた。

涼月もいつの間にか楽しく長門と話している。誰とでも和やかに
話せるのは長門のすごいスキルである。

笑い合って会話する矢矧達の下に、雪風を心配した翔輝がやって
来た。

「雪風は大丈夫？」

「平気そうよ。今はもう寝てるわ」

翔輝の問いに長門が答えると、二人は朝霜の膝に頭を乗せてすや
すやと眠っている雪風を見て二人は笑った。

「長谷川少佐」

突如磯風は翔輝の前に立った。

「何か用？」

「姉さんを、これからも支えてやってほしいんです」

「磯風？」

返答に翔輝が困っていると、浜風と朝霜も頭を下げた。

「お願いします。姉を支えられるのは、長谷川さんだけなんです」

「雪風姉さんを、お願いします」

「浜風、朝霜まで・・・一体どうしたのさ」

突然の雪風の妹達の言葉に翔輝は戸惑うが、三人は続ける。

「今度の作戦、きつと姉さんなら帰ってきます。何せ、姉さんの幸運は並外れていますから」

「姉さんが日本に戻ったら、支えが必要です。それを、長谷川少佐にやっていただきたいんです」

「雪風姉さんを、一人にしないでください」

翔輝はようやく理解した。

きつと、雪風は帰れるが、自分達は帰れない。そんな想いがあるのだろう。だからこそ、生き残るであろう少し情けなくも大切な姉を、一緒にいられない姉を頼んでいるのだ。

死ぬ覚悟のできている三人に何か言おうとしたが、肩を掴まれた。振り返ると、そこには冬月が自分を見詰めていた。

「冬月・・・」

「悪いですが、引き受けてください。それが、三人の決意になりますから」

冬月の言葉に言い返そうとした。だが、できなかつた。

決意した者の考えを否定したり妨害するのは絶対にはいけない事である。それを自分は痛いほど知っているのだ。

四人の真剣な瞳に、翔輝は根負けしてうなずいた。

「わかつた。必ず、雪風を支えてやる」

「感謝します」

「これで、心置きなく戦えます」

「もう思い残す事はありません」

嬉しそうに言って微笑み合う二人に、翔輝は条件を付ける。

「でも、死ぬなんて思っちゃダメだ。必ず生きて帰る。それだけは、胸に刻んでおいてほしい。わかつたね？」

三人は一瞬顔を見合わせるが、再び向き直ると静かにうなずいた。

彼だつて本当は何か言いたいのを堪えて承諾してくれたのだ。これくらいのお返しは当然だろう。

三人は見事な敬礼をすると、雪風を背負つて消えた。きつともう明日に備えて眠るのだろう。

その後すぐに長門が宴会を閉会し、艦魂達はそれぞれ自艦に戻つた。

夜の星空を、矢矧は防空指揮所から静かに見上げていた。

明日は出撃である。こんな穏やかな海と星を見るのは、今日が最後かもしれない。そんなふうにも思うと、ふと哀愁に心が染まる。

本当は自分だつて死にたくない。でも、艦魂である自分には何も変えられない。何も起こせない。

艦魂である自分は無力だ。

そんな悲しく夜空を見上げる。

どこまでも澄み切り、星星が輝く夜空は、幻想的以外何物でもない美しさを放っている。

矢矧はいつまでもそうして見詰める。

「こんな所で何やってるのよ」

そう言つて声掛けたのは初霜であつた。その隣には霞もいる。

「初霜さん、霞さん、どうしたんですか？」

「それはこっちのセリフよ。こんな寒空の下にいたら艦魂と言えど風邪引いちゃうわよ？」

「そうですね。温かい飲み物でも作りましょうか？」

自分を心配してくれる二人を見て、矢矧はじーんと目頭が熱くなつた。

これから共に死地へ行く友の温かさが、何よりも彼女の冷え切つていた心を暖めてくれた。

「ありがとうございます」

「ほら、お礼なんていいから。さっさと入りましょう」

「コーヒーがいいですか？ それとも紅茶ですか？」

そう言つて冷えた自分の手を握る二人に、矢矧はそつと微笑んだ。
「そうだ。自分は一人じゃない。共に戦う仲間がいるじゃないか。」

矢矧は二人の温かさに、今にも泣きそうであつた。
「死ぬのは怖い。」

しかし、それでも共にいてくれる仲間がいますと思つただけで、その恐怖は幾分かでも和らぐ。それだけで十分だつた。

艦内に入る二人にそれぞれ左右二つの手を握られ、矢矧はそつと涙した。

一方その頃、冬月は雪風の横で横になっていた。

すでに磯風と浜風、涼月は床に入つて眠っている。何やかんやでみんな疲れていたのだ。眠くなるのも当然だろう。

「ねえ、雪風」

「・・・何？」

声を掛けると、小さな声で雪風が答えた。どうやら彼女も自分と同じで眠れないらしい。

「眠れないの？」

「うん。明日死ぬかもしれないのに、寝れないもの」

冬月は気持ち良さそうに眠っている磯風達を見詰めた。

「あれはバカつて事？」

「疲れてるんだから、仕方ないよ」

「あなたの言つてる事が全然わかんないんだけど」

「そつかな？」

「そつだよ」

いつの間にか向き合つた二人は小さく微笑み合つた。

「私達、まだ出会つて一年も経つてないのに、明日は最後の出撃になるかもしれないなんて」

「私は一年も生きてないけどね」

「・・・そつだよね。でも、それも明日まで、か」

落ち込む雪風の頭を冬月はそつと撫でる。

「何言ってるのよ。雪風は幾多の戦場を翔けて来たんでしょ？　そこで死んでればそこで終わりだったのよ？　今度が特別な訳じゃない」

冬月の言葉に、雪風は小さく首を振る。

「特別だよ。だって、今までの戦いは《生きる》事を目的に戦ってきた。必ず生きて帰ってくる、それを願って戦ってきた。でも、今回は違う。今回の戦いは《死ぬ》事が目的なんだもの。私達は、連合艦隊司令部から、祖国に見捨てられたのよ」

雪風は悲しそうに顔を伏せる。無理もない。彼女は今まで祖国の為に戦ってきた。なのに、その祖国に死んで来いと言われたのだ。信頼していた分、ショックも大きい。

自分よりもずっと生きて戦ってきた彼女は、薄っすらと涙を浮かべている。

その小さな体の中に、一体どれだけの苦しみを抱いているのだろう。

きつと計り知れない。

多くの姉妹を失いながらも、必死に生きて戦い続けた戦姫は、小さく肩を震わせている。そんな肩を、冬月がそつと掴む。

「何泣いてるのよ。しっかりしなさい。あなたは私達の先輩でしょ？」

冬月の言葉に雪風は小さく首を振る。

「私、情けないもん。今までだって、ずっと姉さん達や大和司令の後ろにいただけ。私の力で切り開いた事なんて、一つもないもの」

「雪風……」

「私、また足手まといになっちゃうのかな？」

「そんな事ないわよ。あなたは戦乱の中を生き残ってきたじゃない。もつと自信を持って」

冬月の言葉にも、雪風はうなずかない。

今の彼女は激戦の中を生きてきた歴戦の戦士ではない。ただ迫る

死に怯える小さな少女でしかない。

そんな雪風を、冬月はそっと抱き締めた。

「冬月？」

「そんな悲しい事言わないでよ。あなたは私の親友でしょ？」

「・・・冬月・・・ッ！」

冬月の優しい言葉に雪風は今にも泣きそうな顔をする。そんな彼女に見詰められ、冬月は照れ隠しでそっぽを向く。

「な、何よ。私じゃ不満だって言うの？」

顔を赤らめながら不機嫌そうに言うと、雪風は慌てる。

「そ、そんな事ないよッ！ 私冬月と一緒にいてくれて嬉しいもん！」

「さーて、それは本心からかね」

「本心だもんッ！ 本気だもんッ！」

「うるさいつてば。みんな起きちゃうわよ」

冬月の言葉に慌てて雪風は口を閉じてまわりを見詰めるが、皆気持ち良さそうに寝息を立てているのを確認して安堵の息を漏らす。

「良かったあ・・・」

「後先考えない所は雪風らしいよね」

「むぐぐ・・・」

反論できずにいる雪風を見て冬月は小さく笑った。

「まあ、雪風の気持ちとは関係なく、私はあなたを親友だと思っているから」

冬月の言葉に、もう雪風は肩を震わせて泣き出した。

「ふゆぢゆきい・・・」

もう今にも抱き着いて来そうな雪風に冬月は顔を赤らめて視線を外す。

「まあ、私が勝手に思ってるだけだけどね。迷惑なら正直に言つてよ」

「迷惑なんかじゃないよッ！ どうして冬月はそう素直じゃないの！？」

「シート！」

あまりの大声に冬月は慌てて指を口元で立てると、雪風も慌てて口を塞ぐ。疲れている磯風達はみなぐっすりである。

胸を撫で下ろす雪風は同じくほっとしている冬月を見て小さく笑みを浮かべた。

「ありがとう」

「な、何が？」

「私を元気付けてくれてるんでしょ？」

「そ、そんなんじゃないわよ」

顔を赤らめながら言う冬月に雪風は優しく微笑む。

「あのね、冬月みたいな人をなんて言うか知ってる？」

冬月は首を傾げるが、少しだけ興味が湧いて、聞いてみる。

「・・・どう言うの？」

「ツンデレ」

「私が、いつ、どこで、あなたにデレたのよ!？」

今度は冬月が怒鳴る番だった。

顔を真っ赤にさせて怒る冬月の口を雪風が慌てて塞ぐ。

「うるさいよ」

「じ、ごめん・・・」

そんな可愛らしい反応をする冬月を、雪風は嬉しく微笑む。

「これからも、ずっと親友でいおうね」

真正面からそんな事を言われ、冬月は視線を外すが、一度だけ雪風の顔を一瞥し、ゆっくりとうなずいた。

「う、うん・・・」

その返答に雪風は嬉しそうに冬月に抱き付いた。

明日死ぬかもしれないというのに、結局この二人も楽しげに話した後、睡魔に襲われて眠ってしまった。

第三章 桜舞う涙の出撃

翌日、最後の航海に向けての出港用意を終えた艦隊は出港の時刻が迫っていた。

戦艦『大和』の甲板には多くの兵達が集まっていた。皆、もう戻って来れぬ祖国を目に焼き付けようとしていたのだ。そんな彼らが見詰める先には、満開の桜が大地を桜色に彩っていた。

多くの兵達の集まる甲板の一角に多くの艦魂達が集まっていた。そんな彼女達に見送られるのは十人の少女達と一人の青年だった。「今さら私が言う事は何もないわ。ただ、あなた達の健闘を祈るだけよ。沖繩を救えるか救えないかは、あなた達に掛かってる。がんばって来てね」

長門の言葉に、大和達は敬礼した。

大和や翔輝達が長門達と最後の別れをしているのを見詰め、矢矧は小さくため息した。

「最後の別れか・・・」

「やっぱり、ちよつと辛いわね」

「別れが辛くないなんて思う人、いる訳ないですよ」

矢矧の側近である初霜と霞も悲しげに最後の別れをしている大和達を見詰める。

「私も、姉や妹に、見送られたかったな」

「私事です。気の通った友に見送られる司令達がつらやましいです」

初霜の初春型駆逐艦、霞の朝潮型駆逐艦は彼女達を除き、すでに全艦戦没していた。

悲しそうに見詰める二人に矢矧はそつと手を伸ばそうとする。

「初霜さん、霞さん、あの」

「初霜先輩ッ！ 必ず生きて帰って来てくださいねッ！」

「霞姉様も、必ず帰って来てくださいッ！」

「初霜さんッ！」

「霞さんッ！」

突如現れた少女達に二人は包囲された。集まった皆水兵服を着た艦魂ばかり 駆逐艦の艦魂だ。

「お前達……」

「みなさん……」

二人は自分達の為に必死に涙を堪えて別れを言う後輩達を見詰め、そつと涙を流した。

「みんな……」

「ありがとう……」

二人の涙は、皆の涙の引き金となった。

初霜と霞を中心に大勢の少女達が泣き出した。

大先輩である二人だけでなく、雪風や磯風達、冬月達にも駆逐艦の艦魂が駆け寄って花束を渡したり熱い抱擁をしたりして、あたりは泣き声を中心とした雑音に包まれた。

仲間想いな駆逐艦達を見詰め、矢矧は少しうらやましいなと思った。

「お姉ちゃんッ！」

そんな矢矧に、抱き付いた小さな士官服を着た長髪の少女に、矢矧は驚く。

「酒匂！？ あなたどうしてここにいるの!？」

彼女の名は能代。阿賀野型軽巡洋艦四番艦・軽巡洋艦『酒匂』の艦魂であり、矢矧のたった一人に妹だ。

しかし『酒匂』は佐世保にいたはず。だから会える事を諦めていたのに、なのにどうしてここにいるのだろうか？

そんな矢矧の疑問に、酒匂は泣きながら叫んだ。

「大原艦長に無理を言って来たんだよッ！」

その言葉に矢矧は二、三度しか会った事のない艦魂が見える『酒匂』艦長大原利通大佐の顔を思い浮かべると、ふと先程までいなかった海の上に『酒匂』が停泊しているのが見えた。その防空指揮所には敬礼している大原の姿が……

「大原さん……」

矢矧は静かに大原に敬礼した。そんな彼女の胸を酒匂が叩く。

「どうして、どうしてなのッ!? 何でお姉ちゃんが行かないきゃいけないのッ!? お姉ちゃんが死んだら、私一人になっちゃうよッ! お願いだから行かないでッ!」

必死に叫ぶ酒匂に、矢矧は小さく首を横に振った。

「それはダメよ。これは私達第二水雷戦隊に任された任務。だから、私はいく。例え死ぬかもしれないでも、私は行くわ」

「嫌だよッ! お姉ちゃん行かないですよッ! 何でお姉ちゃんなのよ!?!」

「他の誰かだったら良かったの?」

「え?」

矢矧はしゃがみ込み、視線の高さを合わせると、真剣な瞳でまだ小さな妹を見詰める。

「他の誰かなら、良かったの?」

「そ、それは……」

言葉に詰まる酒匂のさらさらした髪を、そつとすくう。

「私は帝国海軍、かつて世界最強と謳われた第二水雷戦隊の旗艦。

私は自分の責務を完遂させたいの」

「その第二水雷戦隊だって、今じゃただの寄せ集めじゃないッ!」

「そうよ。新旧入り混じりの集成部隊だわ。でも、彼女達は私にとつてかけがえない仲間なの。彼女達が行くなら、私も行く。姉さん達が命を懸けて守ったこの日本を、アメリカの魔の手から救う為に」

「私のお姉ちゃんは矢矧お姉ちゃんだけッ! それ以外のお姉ちゃんなんて知らないッ!」

そう叫ぶ酒匂に、矢矧は唇を噛む。

そう、酒匂は他の姉を知らない。彼女が生まれたのはレイテ沖海戦の後。その時にはすでにトラック島空襲の際に死んだ阿賀野も、レイテ沖海戦で戦死した能代もない。彼女の姉は自分一人だけだ

った。

「お願いッ！ 矢矧お姉ちゃんは私にとってたった一人のお姉ちゃんなのッ！ そのお姉ちゃんに死なれたら、私・・・ッ！」

ぼろぼろと涙を流す酒匂を、矢矧はそつと抱き締めた。

「ごめんね。わがままね姉で。でも、私もあなたも日本を守りたい。その気持ちだけは変わらないわ。私は日本を、あなたを守りたいのだから、私は行くの。だから、ごめんね・・・」

「謝らないでよ・・・お姉ちゃん・・・ッ！」

酒匂は矢矧の腕の中で泣き崩れた。

小さな体を必死に姉にこすり付け、酒匂は泣いた。そんな彼女の震える体を、矢矧は「ごめんね」とつぶやいて抱き締めた。

姉妹の最後の別れをしている二人を見て、冬月は涙していた。そんな彼女のまわりには自分の妹達が泣いていた。

幸いな事に、冬月型駆逐艦は新しい艦級なので、死んだ妹は一人もいなかった。

すすり泣く妹達を見詰め、冬月は笑った。

「何泣いてるのよ、一生の別れじゃないかもしれないじゃない。私は笑って見送られる方が好きよ？」

そう言うが、妹達は泣きやまない。そんな彼女達一人一人を抱き締め、冬月は笑った。

「春月、宵月、元気だね。立派に生きるのよ」

春月と宵月と呼ばれた少女二人は泣きながら何度もうなずく。

冬月はもう一人の妹、次女の花月を見た。

冬月をもつと優しくした感じの花月は泣きながら敬礼した。

「姉さん・・・ッ！」

「花月。途中まで、護衛をお願いね」

「はいッ！」

駆逐艦『花月』他二隻の駆逐艦は第二艦隊を途中まで護衛する手はずになっていた。

冬月はそつと三人の妹達を抱き締めると、一人そんな光景を見て

小さく微笑んでいる涼月の手を引つ張った。

「ふ、冬月？」

「ほら、姉さんも」

「い、いいわよつ。私は秋月姉妹だし」

「秋月姉妹って言っても、もう姉さん以外いないじゃない」

「そ、それは・・・ッ！」

「それに 私達冬月姉妹は秋月姉妹の義妹。姉さんの妹だ」

冬月の言葉に、涼月は涙をぼろぼろと流し、「ありがとう」とつぶやいた。

「お礼なんてなし。みんなで抱き合おうよ」

「うん・・・っ！」

五人の少女は互いの温もりを感じ合いながら抱き合った。

もう会えないかもしれない。

でも、今はこうしていよう。

そんな想いが、五人の心を包んだ。

冬月は妹達を抱き締めていたが、ふと重い雲が覆う空を見上げた。

「夏月に、一度でいいから会ってみたかったなあ・・・」

夏月とは、建造中の冬月型駆逐艦五番艦・駆逐艦『夏月』の事だ。皮肉にも、『夏月』が完成したのは二日後の八日の事だった・・・姉妹で抱き合う冬月達を、大和達のすぐ横にいる雪風は微笑ましげに見詰めた。そんな彼女に磯風と浜風が抱き付く。

「え？ な、何？」

「姉さん。私は姉さんとずっと一緒だからね」

「私も、姉さんにどこまでもついて行くからね」

二人の言葉に、雪風は嬉しそうに泣きながらうなずいた。

最後の別れをする艦魂達。

だが、時間とは残酷なもので、ついに、出港時刻になった。

大和達は長門達に敬礼すると各艦に戻った。

程なくして、超巨大戦艦 戦艦『大和』を先頭に、第二艦隊は

白波を起こしながら出港した。

第二艦隊こと水上特別攻撃隊の戦力は戦艦『大和』以下第二水雷戦隊旗艦・軽巡洋艦『矢矧』、第二水雷戦隊所属・駆逐艦『磯風』『浜風』『雪風』『朝霜』『初霜』『霞』『冬月』『涼月』の十隻と途中まで護衛に務める『花月』以下三隻の駆逐艦だけだった。燃料不足でこの三隻の同行を断念せざるを得なかったのだ。

戦力はお世辞にも十分とは言えない。相手は数十隻の空母と無数の艦艇、星の数ほどの艦載機の勝ち目なんてない強敵だ。

だが、それでも彼女達は戦いの舞台へ進みだした。

夕暮れの海の向こうへ出撃して行く第二艦隊を見詰め、長門達はいつまでも手を振り続けた。

そして、戦艦『大和』以下十三隻の艦隊は海の向こうへ消えた。

「必ずッ！ 生きて帰って来てねえッ！」

皆の気持ちを代表した酒匂の声は、汽笛の音色の中に静かに溶けた・・・

呉を出撃した艦隊は豊後水道手前で花月達と別れた。

第二艦隊の任務を知っている駆逐艦の乗組員達は甲板に集まって第二艦隊旗艦『大和』へ別れを惜しむかのように帽子を振り続けた。その中にはその花月も涙しながら帽子を振り続けていた。そんな妹を見詰め、冬月も軍帽を降って別れた。

第二艦隊は全艦マストにZ旗を掲揚して豊後水道を南下した。

艦隊は順調に進んでいた。

途中敵潜水艦の触接を受けたが、何とかこれを振り切っていた。

決戦は明日だと、艦隊将兵は今度こそ最後の夜を過ごしていた。

矢矧は自室で初霜、霞と一緒に、雪風達も六人と一緒に雪風の自室で一緒に眠っていた。しかし、そこに冬月の姿はなかった。

冬月は『大和』の防空指揮所にいた。

駆逐艦なんか小さく見えてしまう高さの『大和』の艦橋の高さに最初は驚いたが、今はそれよりも夜に光る星空を見上げていた。

今日でこの星達ともお別れか。
そう思うと切なくなる。

そつと、彼女の瞳から涙が溢れた。

「何しているの？」

その聞き覚えのある声に振り返ると、寝巻き姿の矢矧が立っていた。

「矢矧司令……」

「眠れないの？」

「はい。矢矧司令も？」

「そうね。私も眠れないの。だから夜風を浴びにね」

「ならご自分の艦橋でもよろしいのに」

「この方が風が生き生きしてるのよ」

意味不明な発言だが、冬月はなぜか納得した。

確かに、高い場所の風は心を包み込んでくれる。それを彼女は言っているのだろう。

「はい。とていもいい風です」

「そうでしょ？ 私大和司令に黙ってこつそりよく夜中にここに来てたのよね。たまに長谷川少佐が先にいたりするけどね」

ちよつと昔の事も、今の彼女には遠い昔の大切な思い出みたいな美しさを放っている。

「明日はいよいよ決戦ね」

「はい。そうですね」

矢矧の言葉に冬月は小さくうなずいた。

「怖い？」

「そりや怖いですよ。でも、みんながいます。みんなが私の傍にいてくれるだけで私は大丈夫です。そうすれば恐怖なんて些細な事になります」

冬月は小さく笑みを浮かべながら言う。そんな冬月を見詰め、矢矧も小さく笑みした。

「そうだね。私には頼れる上官と部下達がいる。それで私は戦える

わ

矢矧の笑顔に冬月はこの人の部下で良かったなあと思つた。しばし二人は星空を見上げて沈黙していたが、矢矧は「もう寝ましよう。明日は早いわよ」と言つて去り、冬月もそつと部屋に戻つた。

雪風達は静かに眠っていた。

冬月は毛布を蹴り飛ばしている磯風にそつと毛布を掛け直すと、自分もベッドに入って眠りについた。

第四章 大和魂炸裂

第二艦隊は夜通し南西へ進み続け、ついに大隈海峡を突破。佐多岬を過ぎた後行き先を秘匿する為に北西に艦隊を転進させた。

西へ向かい続ける第二艦隊。

翌七日午前六時半、そんな第二艦隊に頼もしい援軍が到着した。

第五航空艦隊司令長官宇垣纏中将が独断で鹿屋基地から発進させた戦闘機（零戦）隊だった。

護衛機なしの作戦と聞いていた矢矧は突如現れた掩護機に驚愕した。

「何で、戦闘機がここに？」

「さあね。誰かが司令部に反発して出してくれたんでしょ？」

横で言う初霜は気にした様子もない言葉だったが、その瞳には薄っすらと涙が浮かんでいた。

一方の冬月は自分達の頭を先回する護衛戦闘機に軍帽を振っていた。

機数は五機と少なかったが、今の第二艦隊にとってこれ以上頼もしい援軍はなかった。

甲板には兵達が次々に現れて自分達を守る零戦に向かって手を振った。

自分達は見捨てられた訳じゃない。

そんな想いが彼女の胸を熱くした。

冬月はいつまでもそうして軍帽を降り続けた。

その頃、艦隊先頭を走る『矢矧』の右横にいた『朝霜』の艦橋で予期せぬ事態が起きていた。

「ゲホゴホッ！ ゲホオッ！」

苦しそくに朝霜は咳きをしていた。その顔は熱っぽく赤く染まり、疲れ切った表情を浮かべていた。

朝霜は苦しそうに自分の胸を押さえると、自分の体に起きている《異変》に戸惑っていた。

「一体、どうしたの、私・・・ゲホゴホッ！」

咳き込む彼女の横を機関科の水兵が走り抜け、艦長に何かを報告した。その内容と、艦長の下した決断を聞いた朝霜は愕然とした。

「そ、そんなッ！ ダメッ！ 私は最後までみんなと ゲホゴホッ！」

旗艦『大和』に『朝霜』から『機関故障』の信号が送られた。

『朝霜』は機関が故障して艦隊を落伍する事が決定された。

朝霜はぐったりした体を雪風に支えられて『大和』の艦橋に来ると、自分を心配そうに見詰める大和に土下座した。

「申し訳ありませんッ！ 私は、最後まで皆さんと共に戦いたいのに、こんな所で・・・ゲホゲホゴホッ！」

「無理しないで。生きる事も、必要な事なんですから」

大和は朝霜に優しく接した。そんな優しい司令官に朝霜はさらに悔しそうに泣いた。

しばらくして雪風は再び朝霜を支えて艦橋を去った。

駆逐艦『朝霜』は艦隊から落伍。針路を内地に直して南東へ進んだ。

残った九隻の艦隊は交代で入れ替わった上空を守る戦闘機隊を率いてさらに北西へ進んだ。

落伍した『朝霜』は単艦員に向けて来た道を戻っていた。

二重の意味で力なくその場にぐったりと倒れている朝霜だったが、状況は急変した。

「敵機来襲ッ！」

突然の敵機襲来に朝霜は飛び上がった。

確認すると、右方向から敵機三〇機程が迫っていた。

すぐさま対空戦闘の命令が出るが、機関が不十分な『朝霜』は敵機にとって赤子のように弱々しい敵にもならぬ相手だった。

必死に対空砲火を放つ『朝霜』の艦橋でも朝霜が必死に刀を振った。だが、結果は変わる事はなかった。

朝霜はまばゆい光に包まれた瞬間、絶命した。

一方、第二艦隊は依然西へ進み続けた。

すでに戦闘機隊は時間切れで撤退してしまった。

戦闘機と入れ違いに敵索敵機と遭遇。『大和』は主砲を砲撃するも撃墜できず、索敵機は去った。

敵機動部隊に艦隊の位置が発見されたと判断した艦隊は針路を南に変更して沖繩に向かって全速力で進撃した。それと同時に全艦対空戦闘用意を発令した。

午後になり、『大和』の電探が艦隊に迫る敵機大編隊を捕捉した。全艦対空戦闘の命令が下り、九隻の艦隊は旗艦である『大和』を守るようにして円陣を組んだ。

迫る数百機の敵機を、『矢矧』の防空指揮所で睨む矢矧。

「やっぱり、そう簡単に沖繩に行かせてくれないわよね」

顔を伏せて矢矧はため息する。だが、次に上げられた顔は軍人のそれに変わっていた。

素早く軍刀を抜き、敵機に剣先を向ける。

先程までとは違う鋭い瞳で敵機を睨む。

「この戦いが、最後になるかもしれない・・・でも、負けられないッ！」

ドガアアアアアアアアアッ！

すさまじい爆音と爆風を立てて『大和』の四六cm砲が火を噴き、開戦の火蓋が切って落とされた。

『大和』の放った三式対空弾は敵機周辺で九つの大輪花が咲き誇らせた。

炸裂した三式弾は焼夷粒子をばら撒き、一撃で敵機十数機を撃墜した。

世界最大最強と謳われる『大和』の巨砲の威力に矢矧は感動した。「さすが世界最大最強の大砲。海戦はやっぱり互いの主砲を撃ち合う艦隊決戦に限る」

そう思うと、目の前の対空戦闘にがっかりしてしまふ。

だが今はそんな事を考えている暇はない。

再び爆音と共に『大和』の巨砲が咆哮した。

たちまち花開いた三式弾の焼夷粒子に吹き飛ばされ、敵機十数機は火を噴いて撃墜された。

だが、敵機は数に物を言わせて艦隊に迫る。

「砲撃開始ッ！」

矢矧は迫る敵機に向かって軍刀を振り下ろした。

刹那、『矢矧』の十五・二cm砲三基六門が火を噴いた。

軽巡用の三式弾が敵機を撃墜する。

戦隊旗艦『矢矧』に呼応して七隻の駆逐艦が一齐に火を噴いた。

続いて『大和』は三度目の砲撃を行い、敵機を撃ち落とす。

だが、それ以降『大和』の主砲は沈黙した。

敵機はついに『大和』の主砲の懐、艦隊の上空まで飛来した。

後は自慢の主砲を封印して『大和』は要塞のように張り巡らせた

対空兵器を思う存分に奮って敵機を撃ち落とすまで。

第二水雷戦隊も旗艦である『大和』を守るようにすさまじい対空砲火を放って弾幕を張る。

次々に敵機は急降下して艦隊を襲う。

すさまじい数の水柱が各艦のまわり立ち上った。

舞い上げられた海水はまるでスクールのようにすさまじい雨のように各艦の甲板を洗う。

ズドンズドンッ！ズドオンッ！と爆音を響かせて『矢矧』は主砲を撃ちまくる。それに続いて高角砲と機銃が敵機を襲う。

一機、また一機と迫る敵機を撃ち落とすが、多勢に無勢。撃墜す

る数の何倍もの敵機が襲い掛かって来る。

水柱が艦のまわりに何本も立ち上るが、『矢矧』は右へ左へ器用に回避してこれを避ける。

死闘を繰り広げる『矢矧』の防空指揮所では、矢矧が刀を振るって奮闘していた。

迫る敵機に刀を振り下ろすと、その敵機は機銃の攻撃を受けて墜され、海面に激突して跡形もなく吹き飛んだ。

「ここは通させないッ！ 大和司令の所には行かせないッ！」

刀を振るって一騎当千する矢矧は次々に敵機を撃破する。だが、あまりにもすさまじい敵機の数。いくら撃ち落しても切りがない。刀を再び構え直す矢矧は、次の攻撃を放とうと刀を強く握る。

ズドオオオオオオオオオオッ！

敵機に向かつて刀を振り上げた刹那、響いた爆音に振り向いた。

「し、司令ッ！？」

矢矧が見たのは被弾して後部副砲辺りから黒煙を上げる『大和』の姿。

だが、この一瞬の隙が、彼女の命取りとなった。

ズドオオオオオオオオオオッ！

「あがッ！」

今度は『大和』からではなく自分から響いた爆音であった。

引き裂かれるようなすさまじい激痛に矢矧は倒れた。見ると、腹部はえぐられ、真っ赤な鮮血を溢れ出させていた。

「か・・・かはあッ！」

血の塊を吐き、矢矧は悶絶する。

この時、『矢矧』は魚雷一本を受けた。

だが、このたった一本が彼女の致命傷だった。

艦中央部に命中した魚雷は機関部を破壊。機関部員が全滅して、

『矢矧』は航行不能に陥った。

唇を血が出るほど噛んで激痛に耐える矢矧だが、航行不能になった軽巡洋艦は格好の獲物だった。

敵機は『矢矧』に一斉攻撃。

魚雷六本、爆弾十二発が『矢矧』の艦体を砕いた。

「ぎゃああああああああッ！」

断末魔の悲鳴を上げ、矢矧は赤く染まった。

一瞬で矢矧は頭も、体も、真つ赤に染まり、激痛に爪を床に立ててその痛みに耐えるが、少女にはあまりにも残酷過ぎるけがだった。

「あが……ッ！ ぐうつ……いぎい……ッ！」

喉の奥から血と一緒に吐き出る声はかすれ、弱々しかった。

「こんな……所で……」

矢矧は必死に立とうとしたが、結局もう二度と立つ事はできなかった。

一方、被弾した『矢矧』を救おうとすでに乱れた隊列を無視して『磯風』が『矢矧』に向かって走っていた。

「司令ッ！ 今行きますッ！」

主砲の上で刀を構える磯風は火柱と黒煙を上げている『矢矧』に迫る。だが、そんな『磯風』を敵機が襲う。

「邪魔よッ！ どきなさいッ！」

磯風は刀を振るって敵をなぎ払う。だが、敵機は次々にダイブして『磯風』を襲う。

一斉に上がった水柱。そして……

ドガアアアアアアアアアンッ！

「ぐぎゃああああああああッ！」

一瞬で『磯風』は火に包まれ、磯風はその場に倒れた。

「か、体が……ッ！ 焼ける……ッ！」

体を掻きむしって痛みに耐えるが、激痛は治まる事はなかった。旗艦を守ろうとした『磯風』は爆弾一発を受けて大破した。

必死に奮戦する『浜風』は逃げ回るしかなかった。

機銃兵は敵戦闘機の機銃でほぼ全滅。まともな反撃はできなくな

っていた。

主砲の上で悔しそうに敵機を睨む浜風。

「敵はすぐそこにいるのに、一矢を報いる事もできないの……ッ！？」

悔しそうに唇を噛む。

すでに指揮官と姉は大けがを負っている。なのに、自分はそんな彼女達を守る事もできない。

悔しくて、悔しくて、仕方がない。

自分に優しくしてくれた陽炎や不知火といった今は亡き姉達の笑顔が頭をよぎる。

こんな所で負けては、姉達に申し訳が立たない。

浜風は再び刀に力を入れた。だが

「怒りの一撃を受けて え？」

その瞬間、浜風の意識は永遠に失われた。

すさまじい爆音と火柱と共に『浜風』は艦体を真っ二つに折って轟沈した。

「『浜風』轟沈ッ！」

その報告に涼月は慌てて確認した。

先程までいた『浜風』の姿はなく、海からもうもうと黒煙だけが上がっていた。

「は、浜風さん……ッ！ よ、よこもおおおおおおッ！」

怒り狂った涼月は刀を振り回す。

敵機をなぎ払うが、怒りは納まらない。

さっきまで一緒に笑ってくれた彼女は、もう故人になってしまった。

涙が溢れてと止まらず、涼月は咆哮した。

「鬼畜米英めえええええええええッ！」

『涼月』渾身の主砲が敵機一機を吹き飛ばした。

涼月は続いて攻撃に入ろうとしたが、敵機が襲い掛かってきて回

避するしかなかった。

「邪魔よツ！ どいてツ！」

だが敵機は次々に爆弾を投下し、水柱を立ち上らせる。視界が水柱だらけになった瞬間、『浜風』は爆炎に包まれた。

「がああああああッ！」

今まで経験した事のないすさまじい激痛に涼月は絶叫して倒れた。爆弾が命中した艦首は跡形もなく消し飛んでいた。

すさまじい激痛に耐えるが、あまりの痛みに涙が溢れた。

「い、痛いよお・・・痛い・・・ッ！」

涼月はもはや戦う事などできなかつた。

その後、敵機は爆弾と魚雷を全て投下し終えて去った。

残された『矢矧』は原型を留めていないほど破壊されていた。

もつもつと上がる黒煙の中にくったりと浮かんでいる『矢矧』はすでに虫の息であった。

他にも『磯風』と『涼月』も同じく大破。『浜風』は沈没した。

艦隊は今にも沈没しそうな『矢矧』、『磯風』を護衛に『霞』を残して進み、『涼月』は後進しして艦隊から落伍した。

艦隊から置いていかれた『矢矧』以下三隻に、悲しみが襲った。

『磯風』の主砲の上で気絶している磯風の頬を、霞がそつと撫でた。そんな彼女の頬は涙が流れている。

「ごめんね。磯風・・・ごめんね・・・ッ！」

そう言つて霞は立ち上がつて敬礼すると、消えた。

その瞬間、『霞』から魚雷が放たれ、『磯風』に命中。『磯風』は轟沈した。

大破した『磯風』は処分命令が下り処分沈没された。

仲間の命を奪つてしまった霞はいつまでも涙を流し続けていたが、そんな悲しみも長くは続かなかつた。

再び敵機が現れた。

「こんな時に……ッ！」

今から『矢矧』の救助作業を始めようとした最悪のタイミングだった。

『霞』は旗艦を守るようにして対空砲火を放つが、もはや動けない『矢矧』に敵は目もくれずに反撃してくる健気な『霞』を襲った。

「この子は、私が守るッ！」

刀を構えて霞は敵機と対峙する。

刀を一気に振り下ろし、敵機一機を撃墜した。

だが、残った敵機が次々に爆弾を投下し、『霞』は一瞬で燃え上がった。

「ひぎいッ！」

激痛に倒れた霞は敵機を悔しげに睨むが、敵機は去った。どうやらもう攻撃する必要がないと判断したのだろう。

霞は悠々と去る敵機をいつまでも睨み付けたが、力尽きて気絶した。

燃える『霞』の横で、同じく甲板を火の海にしている『矢矧』は最後の瞬間を迎えようとしていた。

第二水雷戦隊旗艦として獅子奮迅した彼女も、今では体中を自らの血で真っ赤に染め、ぐったりと床に横たわっていた。

指通しの良さそうならさらさらな髪も、血が固まって風に靡く事はなかった。

もはや大量出血で意識はもうろうつとし、すでに痛みは感じなくなっていた。

総員退去が命じられ、兵達はもうほとんど海に逃げ込んでいる。兵達が無事に自分から離れて行くのを見て、矢矧は小さく微笑んだ。

巻き込んで死なせてしまうのは嫌だった。

「みんな……無事に……日本に帰っ……てね……大切な人の……所に……」

床に倒れながらも、矢矧は共に戦ってくれた戦友達に小さく敬礼した。

次に自分を守る為に戦って負け、今も燃え続ける『霞』を見詰める。

「私の為に・・・申し訳ありません・・・」

悲しげに言うが、その表情はとても朗らかなものだった。

戦乱の時代の最中に生まれた自分は短き命であった。本当はもっと生きたいと思うし、死にたくないと思う。けれど、抗えない運命は自分を死に導く。

でも、それもいいかもしれない。

ずっと戦い続けて来たが、戦いは好きじゃない。

軍艦の艦魂なのに戦を嫌いだなんて言ったらまわりから非国民扱いされてしまう。そうすれば姉や妹達に迷惑が掛かるから必死に悟られないように死闘を続けて来た。

これで天国に行けたら、こたつに座り、膝の上で眠る猫の寝顔を見ながら緑茶を飲めるだろうか。そもそも兵器の魂である艦魂が天国に昇れるかわからない。けど、そう信じたい。

戦争のない世界でゆつくりと暮らしたい。そんな現世では叶わなかった願いに夢抱き、小さく微笑むと、今はもう見えぬ『大和』を見詰める。

「大和司令・・・さよう・・・なら・・・」

その言葉を最後に、矢矧の瞳は永遠に閉じられ、直後、『矢矧』はゆつくりと海中に没した。

第二派、第三派は続けて艦隊本隊を襲った。

今度の敵機は『大和』に集中したが、その『大和』を守る健在な駆逐艦は『雪風』『冬月』『初霜』の三隻だけだった。

奮闘する『冬月』は『大和』に群がる敵機に対空砲火をする。

「あなた達の相手は私よッ！ 掛かって来なさいッ！」

冬の咆哮に、敵機はそれに応えるかのごとく『冬月』に襲い掛

かる。

爆弾や魚雷を『冬月』は必死に回避するが、敵機は無数に襲い掛かる。

迫る敵機を睨み、冬月は叫んだ。

「負けられないのッ！ 私達は、私達十勇士なんだからッ！」

刀を一閃して敵機を撃ち落とす。

一歩下がって再び刀を握り直すと、続いて迫る敵機二機を撃墜した。

敵機はありつたけの爆弾と魚雷で『冬月』を叩くが、『冬月』も必死になって逃げ回ってそれらを回避する。

だが、次第に追い詰められる。

もつ何度目かわからない敵機の急降下を見て冬月は肩で息をしていた。

「こ、これ以上は・・・もつ、限界かな・・・？」

力なく笑った刹那、『冬月』は爆発した。

「くっう・・・っ！」

必死に痛みを絶える冬月は床に方膝を着いてしばらく持ちこたえたが、力尽き、冬月は倒れた。

薄れゆく意識の中、冬月はいまだ健在の親友を見詰め、小さな笑みを浮かべて意識を失った。

残った『雪風』と『初霜』は被害なしで必死に『大和』を守り続けた。

必死に弾幕を張って『大和』を守る艦隊最古参の『初霜』だが、すでに『大和』の速度は度重なる被雷の影響でひ弱なものになっていた。

そんな『大和』を見詰め、初霜は涙を流して悔しがった。

「何で最古参の私が生き残り、若者達が消えるのよ・・・ッ！」

もう満身創痍の『大和』はまだこの世に生まれて三年しか経っていない子供である。なのに、自分が生き残るなんて、絶対にあつて

はならない。だからこそ、初霜は必死に『大和』を守る。

「大和は、絶対に殺させないからッ！」

初霜は叫び、もう何度目かわからぬ主砲を発射した。

『矢矧』が沈むのを目の前で見た霞は、ぐったりと床に倒れていた。守ると決めたのに、彼女は死んでしまった。

霞のせいじゃないが、彼女は自分を責めた。

矢矧はまだ世間知らずの戦中生まれなのに、戦前生まれの自分が守れなかった。先輩なのに……

「ごめんね……矢矧……情けない……先輩で……」

涙を流しながら瞳を閉じた。

航行不能となった自分には処分が下り、すでにキングストン弁が抜かれていた。

艦はゆっくりと沈み始め、自沈するのは時間の問題だった……今は亡き姉妹達や仲間の笑顔を思い浮かべ、霞は小さく笑みを浮かべた。

「みんな……今から……そつちに逝くね……矢矧にも……

そこで謝ろう……」

そう言って、霞は永遠にまぶたを閉じた。

その表情はどこまでも澄み切った純粋な笑顔であった。

自沈処分された『霞』はゆっくりと東シナ海に沈んだ。

『雪風』と『初霜』の奮闘も空しく、敵機の攻撃を受け続けた『大和』はもうもうと黒煙を上げながら左舷に大傾斜していた。

不安げに『大和』を見詰める雪風だったが、その顔が戦慄にゆがんだ。

『大和』のマストから、軍艦旗が降下された。

「総員、最上甲板……」

それは、軍艦が死を迎える直前に行く最後の使命である。

ついに、『大和』に退艦命令が下ったのだ。

雪風は今にも泣きそうな顔で『大和』を見詰め続けた。
もう会えぬかもしれない司令官と愛する人の姿を思い浮かべ、雪風はほろりと涙した。

その時、

「うわっ!?!」

突如響いた声に驚いて振り返ると、そこには翔輝が尻餅を着いていた。

「ここはどこだっ!?!」

「なあっ!?! 少佐ッ!?! どうしてここにいるんですか!?!」

突然現れた翔輝に驚いて声を上げた。その声に翔輝は振り向く。

「ゆ、雪風!?! 何で君がここに!?!」

「何言ってるんですか!?! ここは『雪風』の甲板ですよ!?!」

「えっ!?!」

翔輝が海を見ると、離れた所に転覆している『大和』の姿があった。

「大和・・・っ!?! 雪風ッ!?! 早く僕を『大和』に戻して」

その瞬間、視界が真っ白な光に包まれて大爆音と衝撃が響いた。

そして、翔輝が次に目を開けた時には もう『大和』の姿はなく、巨大な黒煙が天空高くまで立ち上っていた。

「『大和』が・・・沈んだ・・・?」

呆然とする翔輝の肩に、涙を流した雪風が抱き付いた。

「司令は日本海軍の有終の美を飾ったんです。でも、少佐が無事で良かったです。本当に・・・良かったです・・・っ!」

「雪風・・・」

泣きじゃくる雪風を、翔輝はそっと抱き締めた。

情けなく泣く自分の肩を、自分よりももっと辛いであろう翔輝は優しく抱き締めてくれた。

翔輝は巨大な黒煙を見詰め、涙した。

「さよなら・・・大和」

涙を流しながら敬礼する翔輝を、雪風は泣きながらずっと見詰め

て
い
た。

最終章 雪と冬の想い

第二艦隊司令長官伊藤と同参謀長森下の戦死で指揮権を受け継いだ第二水雷戦隊司令官古村は残存艦艇に生存者救出を指揮していたが、そこへ連合艦隊司令部から作戦中止命令が届いた。

第二艦隊は生存者を救出した後、撤退した。

この戦いで十隻の艦隊のうち旗艦・戦艦『大和』、軽巡洋艦『矢矧』、駆逐艦『磯風』、『浜風』、『朝霜』、『霞』の計六隻が沈没し、『雪風』と『初霜』は無傷。『冬月』中破、『涼月』は大破した。

この日本海軍最後の作戦にして大敗北した戦いは坊の岬沖海戦と呼び、戦艦『大和』以下第二水雷戦隊で約三七〇〇人が戦死した。そのうち、ほとんどは『大和』乗組員で約三〇〇〇人が戦死した。

十勇士と呼ばれた彼女達も、今ではもう四人に減ってしまった。別行動している『涼月』以外の三隻の艦艇は生存者の救出を終えて満身創痍の艦体を引きずって祖国に向かっていった。

無傷の『雪風』、『初霜』に対し被弾した『冬月』の速度は遅く、他二隻から少し出遅れている。生存者を救出したせいで常時以上の兵を載せているせいもある。

そんな三隻の先頭を走る『雪風』の甲板では疲れて眠る翔輝を見詰めて座る雪風がいた。その彼女の隣には冬月が痛々しく体の至る所に包帯を巻いた姿で座っている。

「すーすーと寝息を立てている翔輝を見て、雪風はそつと微笑む。

「少佐。疲れていたのね。しばらく泣いたら寝ちゃった」

「恋人を失ったんだ。その心の傷は深いでしょうに」

冬月は翔輝を見詰める雪風の横顔を見た。

白い頬に涙の後が見える。目も赤くなっていて、自分が来るまで泣いていたのだろうとわかった。

自分に心配かけたくなって、涙を拭いたのだろう。

親友なんだから、もう少し頼ってくれてもいいのに。

そんな風に思っていると、雪風はそつとハンカチを取り出して寝ながら涙を流す翔輝の涙を拭き取った。

「夢の中でも泣くなんて・・・せめて、夢の中では笑っていてほしいのに」

「雪風・・・」

どこか悲しげに雪風は笑った。

「私ね、少佐が大和司令が好きだって事、ずっと前からわかってたんだ。でも、それでも私は少佐が好きだった。今でも大好き。でも、少佐の心の中は大和司令しかない。私の入り込む余地なんて、残ってないの・・・」

その言葉に、冬月は絶句した。

雪風は、翔輝の事を諦めると言っていた。

冬月は真つ青な顔で首を振る。

大和は彼女にとつても大切な人である。そんな彼女を失った苦しみの上、翔輝への恋を諦めてしまえば、必ず彼女は廃人になる。そんな確信が冬月の頭をよぎった。

「雪風・・・あなた・・・」

「えへへ・・・失恋・・・かな？」

無理して笑みを浮かべる雪風。

冬月は直感した。

彼女の恋の終わりは、彼女の終わりを意味していると。

「雪風。諦めちゃダメよ」

気づいたら、口から言葉が出ていた。

「無理だよ。もう、私じゃ少佐の心には触れる事はできないもん」

雪風はそう言って力なく首を振った。そんな雪風を説得しようと冬月は必死になる。

「あなた、今でもこの人の事が好きなんでしょ？」

「うん・・・好きだよ」

「だったら、諦めちゃダメだよッ！ もっともつとがんばれば、き

つと彼もあなたに振り向いてくれ」

「ダメなの・・・私じゃ・・・少佐の支えにはなれない・・・」
今にも泣きそうな雪風の顔を見て、冬月は唇を噛んだ。

仲間を守れなくて死なせてしまい、そして今は生き残った親友の心も助ける事ができない。本当に自分は無力だ。

「大和・・・行かないで・・・」

雪風を説得しようとした腰を浮かせた瞬間、そんな声が響いた。

見ると、翔輝が涙を流しながら寝言を言っていた。だが、その言葉に雪風はビクッ！と震え、涙を流す。

・・・冬月の中で、何かがブチンッ！と断裂した。

「大和・・・やま」

「黙ってなさいッ！」

「ごふうッ!？」

「冬月ッ!？」

突如冬月は翔輝の腹に渾身のかかと落としを決めた。その強烈な一撃を受け、翔輝は沈黙した。

そんな翔輝に「嫌ああああッ！少佐ああああッ！」と悲鳴を上げる雪風を見て、冬月は「あちゃー」と顔を押しさえた。

つい勢いでうざい奴に一撃必殺を決めてしまったのだ。

雪風は必死に翔輝を呼ぶが、今翔輝は生と死の狭間を旅していたので当然反応できるはずもなかった。

「ひ、ひどいよ冬月ッ！少佐に一体何の恨みがあるのよッ!？」

「い、いや、つい勢いで」

「つい勢いで少佐を殺そうとしたのッ!？」

もう涙をたっぷりと瞳の縁に溜めた雪風のアップの顔に冬月は慌てて弁明する。

「あ、安心して。急所は外したから」

「当たり前よッ！あなたの攻撃を急所なんかに入れられたら、少佐は即死するわよッ!」

雪風は気絶した翔輝を抱えて泣く。

「少佐あッ！ 死なないてくださいッ！ 少佐にまで死なれたら私はどうすればいいんですかッ!?」

「そんな大げさな・・・」

必死に彼を呼び続ける雪風を見て、冬月は不謹慎だと思いながらも小さく微笑んだ。

何だかんだ言っても、彼の事を、彼女は愛しているのだ。

彼の気持ちは自分には向いていない。それは彼女自身が一番良くわかっている。だけど、それでも、彼を愛している。

純粋な性格をしている彼女だからこそ、一途に彼を思い、一途に彼を愛している。一途だからこそ、彼を必死に愛している。

そんな純粋な恋心はとても微笑ましく、見詰めるこちらが自然と微笑んでしまう。

「雪風。やっぱり、今でも彼の事、好きなのね」

冬月の言葉に、雪風は一瞬ためらうような仕草をするが、素直にうなづく。

「うん・・・大好きだよ・・・とつても」

そう言つて小さく微笑むが、雪風は力なく首を振る。

「未練がましい・・・よね」

「そんな事ないわよ。だつて 好きなんでしょ?」

「でも、少佐には大和司令が・・・」

「そんなの関係ないわよ。好きなら好きのまま、その気持ちをぶつけるべきよ。まだ、負けた訳じゃないわ」

「冬月・・・」

「最低な事を言うかもしれないけど、大和司令は死んでしまった。

でも長谷川少佐とあなたは生きているじゃない。チャンスはまだあるわ」

「でも・・・私は・・・」

うつむく雪風の肩を、冬月はそっと叩いた。驚いて雪風が振り返ると、そこには優しい笑みを浮かべた冬月がいた。

「冬月・・・」

「あなたは、あなたのままでいいじゃない」

「え？」

「あなたは大和司令じゃない。《雪風》じゃない。あの人とあなたは違うの。それは仕方ない。でも、それでいいじゃない。あなたはあなたで、彼を支えてあげなさい」

冬月の言葉に顔を伏せる雪風に、冬月は呆れたような笑みを浮かべる。

「あなたと彼がくっ付いてくれないと、いつもあなたのグチを聞いていた私まで損するじゃない」

そんな素直じゃない冬月の言葉に、雪風は泣きながら彼女に抱き付いた。

震える肩を必死に冬月に合わせ、抱き付く。

震える肩を抱き締める冬月に、雪風は彼女が願っていた言葉をつぶやく。

「私、もう一度だけ・・・もう一度だけががんばるよ」

「雪風・・・」

「これから先、少佐は辛い日々を過ごすけど、私がんばって彼を支え続ける。レイテ沖海戦で武蔵副司令が死んだ後、大和司令が必死に彼の支えになったように、私も、少佐を支える。そして、いつかきつと・・・」

涙を流す瞳には、いつしか力強い意思が燃えていた。それを見て、冬月は小さく微笑む。

「がんばりなさい。私も、応援してるから」

その言葉に、雪風は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「ありがとうッ！ やっぱり冬月は私の親友よッ！」

「・・・まったく、こういう時ばかり親友扱いするんだから」

「え？ 何か言った？」

「何でもない。それよりも、今は無事に日本に帰る事を考えましよう。あなたが死んだら、あなたが愛する人まで死んでしまうからね」「そうだよ。もうここは、日本の海じゃなくて、敵地なんだよね」

「そうだよ。敵機はもちろん、敵潜水艦にも警戒しましょ」

「うんツ！ 絶対日本に帰ろうねツ！」

「もちろん。こんな所で死んだら、それこそ大和司令に会わせる顔がないわ」

「じゃあ、がんばりましょツ！」

「もちろん」

すでに日は没し、夜空には一面に星が煌いている。

そんな幻想的な星空の下、二人の少女は笑みを浮かべ、星空を見詰めた。

第二艦隊は逃げ帰るようにして佐世保に帰還した。先に退避していた『涼月』は艦首が壊れたせいで後進して退避していたので本隊より送れて佐世保に到着し、その後第二艦隊は二度と出撃する事はなかった。

かつて十勇士と呼ばれ、連合艦隊全艦艇の想いを一身に受けた十人の少女も、今ではたった四人になってしまった。

そして、残った四人にも、過酷な運命が待っていた。

十勇士最古参の『初霜』は七月の終わり、湾内で練習艦に従事していた際に敵機の空爆を受け、対空戦闘中に触雷し大破。後に沈没した。

連戦連勝し続けた連合艦隊最高の幸運艦『雪風』は、戦後に賠償艦として中国に引き渡され、中国海軍旗艦として活躍。戦後二五年経って退役した際に日本へ返還する運動が起き、実現間際になったが、台風により損傷して浸水。復旧不能になり解体された。

満身創痍な艦体を引きずって帰還した『冬月』と、艦首が吹き飛んで後進で帰投した『涼月』した二隻は対空砲台として活躍し、終戦を迎え、一九四八年に解体。その後艦体は福岡県若松港の防波堤となり、『軍艦防波堤』と呼ばれた。

十勇士と呼ばれた少女達の戦いは、こつこつして幕を下ろした

最終章 雪と冬の想い（後書き）

どうもドタバタしてすみません。

当初短編で投稿していたんですが「長い」という指摘を受けて急遽長編に変更しました。

迷惑した方もいらっしやると思いますが、どうも申し訳ございません。

さて、今回の作品は艦魂年代史シリーズの集大成にして最高傑作と言っても過言ではないです。

本編に登場した水上特別攻撃隊十隻の艦艇の艦魂十人で編成された十勇士のキャラを使った今作品は大和、翔輝以外の視点から見た坊の岬沖海戦となっていますが、主に矢矧と冬月に視点を置いていきます。

矢矧は本編にも登場したのでその設定をそのまま引用しましたし、冬月はオリジナルキャラです。

今回冬月は雪風の親友として設定されていますが、これは後にできた設定なので、第四弾『あの空の向こうに』には一切冬月は登場していません。

ともかく今回はすごく長く、通常の短編の三倍近い量なので、「長い」という意見が出たと思います。

ですが、長いけれど作風はしっかりしていると自分では思っています。少し本編から引用した量が多いですが、それも気にならない程度に抑えていますので。

さて、次回作の紹介の前に皆さんに重大発表があります。

約4ヶ月間続いて来た艦魂年代史シリーズですが、突然ですがクリスマスに全20作品で終了とさせていただきます。

急な事ですが、主な理由としてはネタが尽き始めたのと他のジャンルにも挑戦したいという個人的な事情もあって、こうさせていただきます。

これからの予定としては今日中に戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』の艦魂を主人公にマレー沖海戦（イギリス視点）ものを投稿させていただきます。来週は本編第八・五章（読者数の関係で《間章》から名称を変更させていただきました）の他にも登場しているアメリカ側主人公・空母『エンタープライズ』の最後までを描いた作品を投稿し、そしてクリスマスにシリーズ完結編として翔輝の戦後の話を投稿して終了とさせていただきます。

艦魂年代史シリーズが終了次第他の作品を書いてみたいと思いますので、もしついて来てくれるなら末永くよろしく願います。そんな残り少ない艦魂年代史シリーズをこれからもよろしく願います。

追伸

お気づきだと思いますが背景の色を明るい灰色に変更しました。しかも全作品を。それと本編と今作のもくじ（？）の背景に写真を貼り付けたので、どうかご確認ください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979d/>

艦魂年代史外伝 連合艦隊最後の希望 十勇士出撃

2008年8月29日17時34分発行